

『実験農場・ばんけい峠のワイナリーの試み』

有限会社 フィールドテクノロジー研究室 代表取締役
ばんけい峠のワイナリー 樽人 田村 修二 (たむら・しゅうじ)



略歴: 1940年生まれ。1964年東京大学工学部卒。同年通商産業省入省、1984年札幌通商産局商工部長、1988年通商産業省大臣官房審議官、1991年環境庁長官官房審議官を歴任後、1992年退官。同年から1996年まで(社)海外コンサルティング企業協会専務理事、1998年から2000年まで北海道大学先端科学技術共同研究センター客員教授、1999年(社)北海道開発問題研究調査会(現(社)北海道総合研究調査会)理事、2000年(有)フィールドテクノロジー研究室代表取締役就任、現在に至る。

ばんけい峠のワイナリーと言っても知る人ぞ知るの世界である。本来の私のライフワークは地場産業の振興であり、呼ばれれば世界の果てまで行ってその地域の人々と一緒に事業を興すのが仕事である。

地場産業が何故大切かというまず第一にその地域の資源や産物が産業活動の中心となっていること。第2には地域の人々が中心となって働いていること。第3にはそこが市場(いちば)となって消費者が集まっているということだ。その地場産業が発展すれば流通や運輸、教育や情報など産業活動に必要なインフラ(公共投資)も生産性向上に大いに役立つことになる。

ところが北海道では開拓の歴史が短いため本州の伝統的産業のような産業集積が弱い企業も育っておらず、新しい製品や技術を生み出す力がどうしても不足している。

そこで考えられたのが産業クラスターの形成である。戸田一夫元道経連会長のリーダーシップで産業形成を人為的に行なってみようという運動であった。産業発展に不足している要素を外部から積極的に導入して利用する方式である。

その頃たまたま道産の生イクラがO-157の中毒事件を起こしたこともあって、北海道の中小企業が簡単に買える殺菌用のオゾン発生装置を作ろうということになった。本州では1,000万円もする装置を産業クラスターでは100万円で作ろうとする野望である。本州から特許を買い、技術指導を受け、高圧放電用コイルを巻く糸巻から試作しながら何とか完成させた訳である。

この時に皆が学んだ事は、道内を探すと有能な人も加工技術も素材も不十分ではあってもあちこちに存在していることであった。言い換えると地域にチャンスが与えられれば自分達で発展できる可能性が大いにあるという事である。

発展のためには経験することが大切と思い、生産性の最も高い大量生産よりも中世に戻って手づくりの産業を興そうと思ったのがわが研究室の始まりである。

ところでワイナリーは良いぶどうが獲れなければならない。そうすると農家とワイン作りと両方をやることになる。そこで2人で運営できるワイナリーの規模が決まってくる。酒税法という法律では最小規模は年間6,000リットル、720mlのワインビンで8,000本になる。1日あたり24本を生産し、販売できれば良いのであるが。

使用する原料ぶどうは約10トン。仁木町の農家まで自分で受け取りに行く。秋の週末は買い入れで大忙しである。

でも農家を訪れるのはとても楽しみである。ぶどうの育て方、農家の誇り、地域の文化などぶどうを仕込む時にいつも思い出している。

さて、ワイナリーが大切なのは生産の現場であると同時にお客様が買いに来てくれる市場でもあるということである。こんなワインじゃダメと言いながら何時も買いに来てくれるお客様。せめてワインに加えて楽しい話題でもと思って実験市場を設け、パンやガレット、ケーキなど商店では売っていないものや仲間の試作品も置くようになった。今年はワイナリーにツーリズムが入ってくるので居心地の良さや景観も考える。

手づくりでもやろうと思えばここまで出来るというモデルになって多くの仲間の頑張りになり、励みや癒しになればと頑固にバカを続けている。

ああしんど。



ばんけい峠のワイナリー
ワイン醸造は地下室